

毒消し売りの生活史（2）

佐藤 康 行

I はじめに

本稿は、生活史の手法を用いて、薬の行商を生業としてきた女性の生き様を把握し、そうした諸個人の生活史を通して、従来の近現代史を新たにとらえ返そうとするものである。そして、そのさい、近代日本の国家が作った家制度がどのような形で具体的に女性たちの生活のなかに表れていたのか、そしてそれにもかかわらず、女性はどうのような人生を歩んだのかを行商活動を中心とする日常生活のなかに読みとることに主眼を置いている。

調査対象者は、現在巻町角田浜に住む大正3年生まれに加藤キクさんである¹⁾。キクさんは、刈羽郡西山町に生まれ、小さい頃父親が亡くなり、母親が再婚したためにモライゴとして角田浜の家に貰われてきた経歴を持っている。

これまでに取り上げた人は、百姓を生業とする長男に嫁いできた女性であり、なおかつモライゴではなかった²⁾。今回取り上げる人は、モライゴとして貰われて来た経験を有しており、次男の人と結婚したため、村外に移り住んだ経験を持っている。行商は、キクさんが16歳の頃から夫が病気になる71歳まで栃木県の氏家町を中心におこなわれ、その行商生活は実に55年の長きに渡っている。

II 毒消し売りの生活史

<モライゴ>

そう（4歳の時に貰ってこられた）。（毒消しさせるために貰った）そういうわけでもないんだよね。あの、そういうわけでもないんだけど、やっぱり自分でために（自分のために）しようと思って、子供少ない人が主に貰ったんだよね。だから、子供の多い人に限って子供貰ってないもんね。子供、むかしはいまと違うから、7人も8人もいる人が多いでしょう。そういう家の人は子供貰ってないんだよね。子供の少ない人が主に貰ってたんだよね。

<子供の頃>

小さい時はあまりよその子守はしなかったんだがね。自分ちの、学校5年生の時に、あの、子供ができてさ。どういうふうに学校いがんだらいいかしてさ。そして、その頃学校に行っても行かないでも、先生が「どうしても来い」なんて言わないでさ。そいでさ、「今日は子守しなきゃあならんすけ休む」というとね。「そうか」って、それで通ったの。そして、そんげして

ね、5年生ぐらいから、あんまり学校に行かなかったなあ。だからね、自分の名前もろくに書けないでね。

あのね、商いに行っただってさ、やっぱり何の不自由したかて、自分の子供だけにはまあ、なんとか、そのね、自分の名前だけぐらいは書けるようにしてやりたいと思ってたって。それも、やっぱり貧乏しててね、学校もあげねえでね。あの、おいたってね。あの、やっぱり、子供が、ほら、働きが悪かったすかい、学校もあげねえていたのね。

5年生だったってね、子供おぶって畑の仕事もしてさ、だから、何でもしたね。大人と一緒に。で、手がなかったからね、やっぱり。いつでもおれ言うがさ。いまの人はさ、「あれがなくては食べられない。このおかずがなくちゃあ食べられない」って言うけどね。あのね、いろいろ経験してきたから、おれは、何が、栄養が足らんとなんなのって言ってもね、山行けば梅干し1つでもね、あの、何食ったよりうめえ、そう思って食ってるん。だからね、それでもね、おれ言うんだ。80の余生きててもね、お産した以外に医者に入院したってことがねえね。越前浜の先生が言う。おれたまーにね、「風邪引いた、先生、風邪の薬貰いに来た」。そう言うのと、「鬼の攪乱だ」と言うて。「おまんたみたいなのばかりだと医者は困るすけえ」。そう言うのと、「いやあ、おかげさまで、貧乏してるでもね、身体が丈夫で助かる」って言うよね。毎日喜んでいるの。

<弟子に行く前>

あの、その頃ね、12ぐらいから（毒消しに）行ったんだよ。はあ、小学校卒業すると出たの。そうだね、あの、高等科に行く人はめったになかったわけだね。はあ、子供が学校卒業するのを待っていたぐらいだった、その頃は。

それまでね（12歳から16歳までの間は）、家が百姓あったりさ、子守したりなんかしていたから、（毒消しには）やっぱし行かないでいたった。学校終わるのを待ってて、ほとんどはそうやって行ったんだよ。

<行商先を変える>

おれは最初東京へ、一番最初行ったんだけど。あの、脚気（かっけ）になるんだわね、東京に行くと。それで、辞めたの。道路がアスファルトだから、脚気になるんだって。それで、医者に行ったらね、アスファルトの所でなければいいと言うわけで。あの、これ取っ替えたわけなんだよね。

一番最初の16の時は東京に行ったの。弟子で行ったの、裏の人と。それで、親方変えたの。それで、田舎へ行っただって適当に、どこそこの人がいないから、あの人が田舎へ行くんだからって言ってね、（親が）その人に（親方に）頼んだの。

<弟子の頃>

あのね、何年かそこに弟子にね、つくでしょ。そうしたら、その日その日のうちに、親方と一緒に歩くからね、その日その日夕方になると、売上を親方に渡すわけ。

親方がね、だいたい連れていかないと（弟子は）分かんわけよね、初めて行くんだから。そうして、慣れてくると、今度は半年も一年も経って、今度はだいたいコースも慣れてきて、分かる時になれば、あの、お昼までにあそこの部落までに、親方がこっちから行って、そして弟子どもがこっちのほうから行って、だいたいね、お昼になったらあそこの部落で会うというようにして。そうして一緒っていうのはダメだから、部落を分けて、そうして行ったの。

で、その頃はさ、宿っていうのがね、その、あの、決まっていなくて。農家ばかり歩いたからね。宿っていうのがその時は決まっていなかったからね。ずっと10日（とうか）ぐらい、10日ぐらいだな、薬は軽いからね、着替えとか、雨具とか、その薬を担いでね。そしてね、10日ぐらい出て。そして道具を置いた宿というのが決まってるからね、そこに戻ってくるさ。

<親方の教え>

親の頃には、ここからね、歩いて会津の山を越えて行ってたんだって。親の頃はね、歩いて行ったんだよね。そして、私たちが行く頃には盤越西線があって。本線に出るまでは急行がなく、朝出れば一日がかりなんだわね。

そして、ずっと知らない所へ行って、夕方になると「こういう訳で、帰り道なんだけど泊めてもらえないか」って言うよね、女だからね、泊めてくれたわけ。ちゃんと、はよね、くれるものは、泊めて貰った礼にくれるのはね、一品（ひとしな）だけやれないから。小さいのをだいたい10銭ぐらいのをね、その頃で10銭ぐらいのやつをね、ずっと拵えとくのさ。毒消しとか、赤玉とかさ、それ全部、拵えておいて。そしてだいたい、これ泊めて貰って、泊めてもらえば、このくらいでいいかなと思うほど、「はあ、いい、いい」って言うけどね。そのかわり、百姓に泊まるんだから、あの、泊める人も喜ぶんだわね。女だから泊まれば、拭き掃除手伝ったり、そうして今度ね、朝になれば、忙しくなればやっぱり嫁さんと一緒になって起きて、そうして拭き掃除手伝ったり、鍋釜みんな洗ってね、そうして伏せて出てくるんだよね。そうすると、やっぱり忙しい時になるとね、やっぱり百姓の人はさ、泊めたくてさ。夕方になって商いに行くと、「今日、どこに泊まるの、今日、どこへお泊まりですか」って聞くんだよね。「いつも泊めて貰うあそこまで行くんだ」って言うとき、「今日は、ここへ泊まってくれないか」って言うでもね。やっぱり慣れた所がいいから、一番最初決めた所まで行くんだがね。だから、はよだいたい、そのね、いっぺん泊めると、はあ2度目に行くと、自分でも、その泊めた人は泊めるもんだと思って。姿見るとね、「今日はうちへ泊まりでしょ」って言うからね。はよ（早くに）決めてしまうんだよね。だから、親方がそれをちゃんと教えるの。「あのね、忙しい時に泊めて貰ってお客様になっていると、『お客様になっていられるものをまあ泊められない』って言うことになるから。そういうことがないように。子供がいたら子供をおんぶしてやるとか、お掃除をしてやるとか。何でもそのね、ただ今日はくたびれたからっていいで、何でも手伝ってやるのよ」って親方に教えられるの。だから、それを守って、親方が教えたのをずっと守ってくるから。まあ商いに出る人はどうしてもね、商いに出た人をね、嫁に貰いた

がるんだわね。

<嫁選び>

嫁を貰う頃になると、弟子、「あそこは弟子何人連れて行ったわね」って、そこに聞きに行く
と、やっぱり親方が教えるんだがね。親方の所へ聞きに行くんだわ。だから、旅のほう行くと
ね、おらが若い時行くと、「ねえちゃん、あの越後のほうではね、商いに出ないとお嫁さんに貰
う人がいないんだってね」って。「そんなことないわ」って言ったってさ、「いやあ、そうだ
って言うんだ」、なんて言っただ。まあ、ず、「おかしい」って言って笑うんだわ。やっぱり聞く
んだってね。その商いに行った人に聞くみたいなんだわ。そして、「そうなんだってね」って。

いまこそね、あの人は美人だから、この人はスタイルがいいからなんて言うたって、むかし
は親の言うなりだからね。「あの人は商いに行っても一生懸命にあれしていい子だ」と言われ
ると、はい村だからね、評判になって、その人の所へどうしてもね、行くんだがね。

<宿探し>

泊まる農家は決まっていなくてね。今度はだいたい、一番最初の時は、一番最初に行った時は、
まあこう決めていないで、商いしながら、やっぱりこう夕方になって泊まる所を、農家の人は
人がいいから、「どちらのほうにお泊まりですか」って聞かれる時に、「泊まる所決まってい
ないんだけど」って言ったら、「じゃあ、うちに泊まって下さい」って言われるんだわね。そうす
ると、「これいい人だなあ、よさそうな所だなあ」と思った所をそこを決めてね。そして泊めて
貰って。それから今度ええかったなと、そこへだいたいいっぺん泊まってみればその気持
ちっていうのが分かるからね。今度また回って来た時に、「今度うちに決めて下さい」って言わ
れて、今度またその次に行った時にね、そこんち（その家）に泊めて貰って、そうやって、
そうさなあ3年くらい、そうやっていったな。

<毒消し売り>

（口上については）自分が年中行ってる所だからね。「いますか」ってさ言って、声かけるわ
ね。そして、黙ってれば、「ああ、これいないんだな」と思うし、今度はい行くとね、行って、
その家ならその家、「奥さん、いますか」と言うとき、居れば出て来る。だから、そう知ら
ないところなんて行かないから。

（持って歩いた薬は）六神丸（ろくしんがん）とかね、毒消し。主に六神丸、毒消し、頓服だ
こてな。風薬も。そのぐらいだな。あとね、あの、だいたいそこらにあるものはあれだけでも、
あの風の薬とね、毒消しとね、六神丸だけはやっぱりあれしてもらってさ。普段、毒消しだら
ばほとんどの人が使ったんでねえろうかねえ。あそこらの人は、ほら、虫にさされた時はそれ
咬んでくっつけたりさ。飲んだり付けたりだから。あの、毒消しはいるんだよね、一般の人は。
あの、付けることもできるの。あの、蜂にさされた時にさ、こうにゃんにゃんにゃんにゃん咬
んで。その刺されたところにこうするとね、毒を消してね、すぐに治るんだよね。弟がおこぜ
に刺された時だった。

それから今度、だんだんね。その頃は、ほら、百姓でも何でも、医者もなければ、薬たってもね、ほんの毒消しや正露丸みたいなものに頼っている時代だから。あのね、やっぱりのんびりしてたからそうやって。

こんだ（今度）、だんだん世の中が開けてきて、宿を決めて自分で駅の、東北本線なら東北本線の駅の便利のいい所を宿とって、そうして3里ぐらいならば、行って戻ってこられるからね。それで乗り物ってのがあまりないから、そういうふうにしてたったの。親方と3人で、あまり大勢だと泊める人もたいへんだから。3人ぐらいでしてたったの。

こんだ乗り物があるからね。あの宿に必ずね、3里か4里ぐらいのそこは、そこへ帰ってくるわけなんだよ。むかーしのね、行った時は帰ってこられないから、乗り物がないからね。百姓屋のそこへ、1つぐらい、1つか2つね。薬は軽いからね、やっぱり2・3日ぐらいの分を担いで。そして百姓屋へ泊めてもらった時もあったの。それでもさやっぱり泊まってもさ、ただ泊まって歩けないからね、考えて。こんだ、ほら、友だちどうしてもって、共同でもってさ、家借りてさ、そこまで戻って。あの、まあ、ここならばここ、巻ならば巻まで今日乗って行って。こんだは巻のザイに歩いて。またそこから乗って来るようにして。そうやって歩くと結構回られるんだよね。

だいたい薬がなくなると、宿に自分が送っておく所が決まっているからね。そこへ来て、「こういう品物が不足したなあ」と思う時に、角田とか角海とか、越前とか薬出す人が決まってい、そこにむかしだから手紙をよこすと宿に送ってくれたの。手紙でやりとりしてたの。

薬代は半年間払わないで、そうして一旦ただで送ってもらって、今度帰って来た時にそれを一挙に払わなければならないの。

（金証丸は）あのね、あれ、いくらのもあるんだよね。5銭とか10銭とかさ。20銭、20銭が一番大きかったろうかね。毒消しもね、5銭と10銭と。そして毒消しはそれでも50銭があったかね。

本元（ほんもと）はね、巻の小林さんです。薬をずっとどこの県でもみんなあの人がね、番頭がいて、その人が持ってきてくれたの。一番始めの本元はね、やっぱり個人でもって拵えたんだよね。そして、この角田村ではさ、5軒。（仕入は）やっぱりね、一軒からと言うと、あの、まとまらないんだよね。それでみんなからちとずつね。そうやって持って行ったの。「この人はうまそうだなあ」と思うと、「（薬を）とってくれ、とってくれ」ってね、「うちのを持て行ってくれ、持て行ってくれ」言うてさ、やっぱり言う。だから、ほら、だいたい一軒の家からばっかりだとあれだから、ちとずつね。気持ちで、部落ならばさ、そうやってきたの。

（元払いの宴会は）カクセツって言う人もあるし。ナカゲって言うてさ、みんなの仲間が寄ってさ（戻って来た後に本元で宴会が開かれた）。あれ（私は）どこにしたっけな。

薬を受取に行く日は決まってるんだわね。あのさ、前もってさ、「いついつかは薬を渡す日ですよ」って言って業者の人が言うてくるん。そうすると、そこに行くん。自分が持て来てね、

集めて一度にあれしらんない（できない）から。だいたいこのくらい1か月分とかさ、そのくらいにして、そして送って。足りない時には手紙をよこすとね、すぐに送ってくれたの。曽根は腹のいたい薬とか、風邪は巻の小林さんとか。そういう所から集めて、そうしてまとめて。

<薬の儲け>

（儲けは）どれぐらいだったのか、忘れたでわ。毒消しは、半分、半分以上儲かったこての。10銭の毒消し売ったって、5銭、5銭よりもっと安かったんだろかな。その頃はね、薬は儲かったんだわ。

毒消しはね、毒消しがね、一番儲かったわけなんだよね。それでも、農家のほう行くとさ、やっぱりあんまり薬局も遠いし。山ん中、日光鉾山のザイ、宇都宮のあっちの日光鉾山ほうに行くと、医者もなければ薬屋も遠いからね。山ん中の一軒屋みたいなところに行くとね、薬が売れるんだよね。んだけれども、そこまで行くのがたいへんなんだよね、歩いてさ。そうして、また行っても、なかなか買わないんだわね。金がないから。まーるで、山ん中ととととと山登って行ってね。毒消し5銭なんて言ったらね、まあ、それこそがっかりしてしまっ。

クスリクソウバって言ったっても、むかし毒消しはさ、ほんのいまは売ってないから言うけれども、半額、半分以下だわね。だから、薬ばっかり売っていれば、儲かったわけ。薬ばっかり売ってたんだけ、その頃。薬ばっかり売ってても、その頃ね、結構儲かるから、手間になったんさ。いまは、あんなことしていたら赤字になるわね。「クスリクソウバ、ボウズマルモウケ」って、そう言うとお寺様、お寺様だって「儲からん、お衣（ころも）が切れるすかい」。おらだの願正寺の住職にせえ、「あのね、流行歌手だったってね、その時その時に歌覚えねえばねえ、誰も聞く人がいないだでも、お寺様の御経がっていうのは、それひとつでも読めばなら変わるがねえ」と言うとお、住職は「おかしい」って。「おばさんみたいなこと言う人いないわ」って言うけれども。

<金物・乾物売り>

あのね、だんだんだんだん薬が高くなってきて、薬、そして医者もあれば、あの薬局もあって、売れなくなったわけよね。それだから、薬もだんだんだんだん高くなって面倒なんだよね。我々みたいの、やっぱり無学の人がね、あれを、そこの行商の鑑札を受けらったって勉強があるわけ。その講習に行って、やっぱり、あの、面倒だから薬廃業したほうがいいってわけで、早めにそれ（毒消し）を辞めて。今度ね、あれ専門になったの。金物と大口さんの（乾物）と。そうすると簡単でしょう。だから、はあ毒消し辞めてからしばらくになるわね。毒消し辞めたのが、あのね、辞めてから、このジイが死んでから10年ぐらい、その前に10年。辞めてから20年ぐらいになるかな。あの時は、その、辞めた時は、その毒消しを辞めて、あの金物と乾物だけにしたんだよね。（行商は）ジイちゃんが死ぬまでやってたんだよね。

あの、あの、あそこの、博労の離れに移った時には、みんな商い辞めてね、おれが1人だったんだよね。だから、まあ、あそこの人も「だんだん少なくなったわね」って言うて

さ、「私の家にも寄って」って言うようになってね。はあ遠いところ行かないで、町にばかりね、居てね、商売になったの。だから、楽だったんだよ。それで、はあ、その頃ね、薬なんて儲からないから薬売らないでね。三条から金物と、それから見附のほうから着る物、そういうものをね、送ってもらって売ったり。それで、東京のね、あそこに、上野の駅の近くにね、九州の久留米、久留米に絣屋があってね、そこに問屋があるんだわ。そこに行つてね、その絣を仕入れて売ったの。そして、その絣屋がこんだ年寄りになって、はあ潰れてね。それから、今度それを、着物を辞めて、食べ物にしたんだよね。内野の大口屋からコブとかワカメとか、そういうものを送ってもらって。そして暮れになるとね、やっぱりほら、お歳暮になるようなものを、そうして売ったの。それが、はあしまい（最後）だったねえ。

そうね、乾物はそう、金物のほうが利益があるけどね。乾物はね、そこらに売ってるから、それほどね高くも売れないしさ。金物は今度ね、値段付けないでさ。自分がいいかげんに、そういうふうにしちゃあ悪いんだけどさ。「三条の金物でいいんだよ」って言って。そうすると、やっぱり買う人も長年のあれだからね、信用してるわね。そうすると、結局鎌一丁にさ、600円も700円もかぶせてやったって、「はいはい」さって買うわけよ。その、乾物というか、食べ物はそのいうわけにはいかないわけ。そこらのマーケットに行つて、それと照らし合わせると「おばさん、高い」ということになる、やっぱりね、気の毒だから。だから、あんまりね、それにまた食ったことのない特別のあれならば、ちっとは高く売るけどもさ。食いはそう儲からんけれども、足が早いわけさね。食べてしまえば、おんなし所へ2、3日経てればまた売れるでしょ。金物は、今度（こんど）は鎌一丁売れば一年も。包丁一丁売れば何年も。

いろいろ持つようになると、背中に担いだけではね、金にならないんだよね。だから、自分でリヤカー拵えてもらって、小さいリヤカー拵えてもらって、そこへいろいろ、三条の金物とかさ。そして今度はそこへ、薬ばっかだったら、あまり利益にならないから。金物乗せたり、あんまりその腐らないものとか。しまいにはコブだとかワカメみたいに、長持ちするようなものを乗せて、そして歩いたの。

農家が多かったけどね、今度はあ年取ってからさ、リヤカー引っ張って歩くようになってから遠いところ行かないでね、町内（まうち）にばかり。宇都宮の市内。もっとね、ほんとの市街のほう。宇都宮のほうまでちょっと離れているからね。いかないで、もうちょっと手前のほうに町があるんだよね。宝積寺の手前の氏家という所。氏家はね、割りと、あの、広いんだよね、町が。そこで降りてその近辺をずっと歩いたんだから広いんだよね。だから、その町内にいても、リヤカー引っ張って行つたってね、近くて。雨が降った時なんか、隣から「今日は雨が降って遠くにいけないから隣組だよ」と言う、「はいよ」って言ってね。そして、無くなった時は何回でも家に取りに来られるから、町は便利だった。

若い時はね、春行つて、春田植え、4月ごろ行つて。10月に入るとね、帰ってきたわけですよ。だけど、今度、ほら浜茶屋があるようになってからね、浜茶屋するようになったから、盆

に一旦帰ってきて、その茶屋が終わるとまた行ってね。そうして、いくらもないで。いくらもたって、2か月も3か月もないで帰ってきたの。

<ハナブツタ>

（結婚したのは）20歳の時。その時ね、（カケは）2年ぐらい。結婚しても弟子について歩くとさ、やっぱりね、親方がピンハネするでしょう。そうすると、今度は嫁に行った先にさ、働いたのをやるのが少ないから。結局自分で一人立ちして行けば、一生懸命になってね。欲出しですれば。まあ、その弟子になって行っただけ、一生懸命なでもさ。あの、そうしてハナブツタを切る。

「辞める」と言うと、（親方が）気に入らないわけね。やっぱり自分で連れていけば、これ（お金）入るもの。だって、ほんのね、くれる時は、「これだけおれ売ったんだから、これだけ貰いたい」なんて親方に言えないから、親方のくれる通りだね。そいだから、親方はもっと連れて行きたいわけ。だけど3年も行けば、こっちはだいたいね、分かるもんね。そうすれば、「あの、悪いけども、今度はだいたいの道順を覚えたから、あの、いままで世話になったけども、来年からは1人で行ってみますから」って言うよね、それが気に入らないでね。ここにすれば、ハナブツって言うんだけど、はあ、行ったり来たりしなくなるわけよね。あの、ハナブツになって、自分が連れて行きたいのに、こっちが断るんだから、はよ、あの、付き合いを辞めてしまうわけさ。そして、こっちがいくら頼んでもさ、まだ何しろ百里も先に行くんだから。いついかにこっちは行こうと思うんだけど、その親方にさ、「一緒にあそこの所まで行ってもらえないか」って言ったって、「ふん」って言って、鼻の返事してさ。そうしておんなし新潟の駅から行くのに言葉も掛けないでね。そして、こっちは、はあ別れてしまえば、どんないやがらせしられたって、いままで連れてってもらったんだから、しかたがないと思ってね。あの、汽車の室（しつ）をとっかえてもそれに乗って行くんさ。そうすると、今度、その氏家の駅に降りて、降りると、ああやれやれと思って、これからも長い月日だから、何かあった時にお互いに話し合いしてもらいたいと言うとね、「ふん、そんなことなんて知ったこっちあねえ」と。あの、「おれがいままで連れて歩いたとこの、泊まったとこへ行って泊まらないでくれ」と。そして、「おれの得意先は荒らさないでもらいたい」って言うからね。「それはね、心配しないで貰いたい」と。あの、むこうがさ、「おらうちはこういう人が来るんだから、あの、いらないよ」って言うのに、無理にこっちがね、「いや、おれのを買ってくれ、買ってくれて、言ったんだら悪いけども、こっちが言わないでも、むこうが買いたいって言った場合はね、おれは遠慮しないで買ってもらう」と。「だから、心配しないでくれ」と。で、「あんたのね、泊まる所へは泊めてくれて言わないで、自分が新たに泊まる所作るから」って言ってさ。そうして別々になったの。そうすると、比較的新たに作ったおれのほうがいい所へ、宿をね、今度取るようになったんだよね。

<宿の共同>

だけど、あの人（親方）も早く亡くなったみたいだけどね。今度娘が行ってたったんだわ。自分の娘が大きくなって、こんだ連れて行ってさ。そして、娘が行ってたったんだけど、なかなか親子というわがままだから、親によっかかっているからね。宿が自分では探されないで、一旦困っていたったんだわさ。そいで、こんだかあちゃんが死んでから、「おれも1人で寂しいから、おばさん一緒に宿にしてくれないか」って言うからさ。そうすれば、おれはいくらどうあろうとも、いっと（一番）最初氏家に連れて行ってもらった時は、その人の親が連れて行っただから、「じゃあね、来いばいいわ」って言って、あの人が辞めるまで一緒にいたったの。だから、いまでも下（しも）の端（はじ）だけどね、部落で何かあると懐かしくなるとね、「いつも丈夫でいいね」って言葉かけるん。

25年間いた時とね、その前に10年間いた時の中間に、宿がなくて、適当な宿がなくてまごまごしてた時に、おれが駅の前にね、ちょうど寄りつけでいたった所へね、そこを借りたの。そしたら、あの人（親方の娘）が宿がなくて、よその座敷みたいなどこに居てね。あの、困るから、「広い所に居るんだから、おれも入れてくれないか」って言うからさ。そうだな、「おれはこっちのほうに初めて来た時に、あんたのかあちゃんに世話になったんだから、来ればいいわ」って言ってね。そうして、いたったの。ああ、そうさそうさ。そのね、10年間いたった隠居に、あの人が来て、そうして一緒にいたったの。そうしたら、こんだあの人が子供ができるので、その隠居が、おれは断ったわけじゃあないんだけど、宿の隠居がね、「おれは隠居する時に、孫がうるさいからって言って、ばあさんとここへ隠居したんだから、他人の子供で、あの、うるさい思いをしたくないから。子供ができるんだったら、来年はここを出てよそを探してもらいたい」って言うわけで、そうして別になったの。

この子（娘）が中学を出て2年ぐらい一緒に歩いたかな。そして2人でも今度はね、宿が適当なのがなくて大きなのを借りたから、あっちの人がね、「一緒になってくれなってくれ」って言うので、松の山の人で兄弟姉妹の人と4人で、あの隠居を借りていたった。

4人でいた時のはね、工場を持っている人の隠居だからね、広いんだ。広くて、そこに10年ばっかしいたったんだ、そこに。私は先にそれ借りて、ずっといた所に。あの人が「おめえ、これ広すぎるがね、おれたちの宿がないすかい、おらも仲間にしてくれ」って言うさかいね、「はあ、来いばいいがね」って。そうして、4年ばかりいて、宿の人が年とっているからね、その隠居がなくなってね、そいでなくなっても本家の人が「貸しておきたい」って言ったけどさ、あんまり大きい家だすかいね。あの今度家を空ける時があるでしょう。だから持ちきれないから、「いいや、ここを借りないで、違う所にしよう」っていうわけだ。そいで分かれて、また別の隠居屋を借りたの。あの手いらは違う隠居屋借りて。おれはそれまでに、しかも古いからね、どこでも知っているから。今度あそこへ馬市がたつてね。馬の博労が入るね、離れがあって、そこを貸したいっていうわけで、そこ借りて25年間あそこにいたったの。終わるまで

そこを借りていたの。

<宿の人との付き合い>

あの、宿の人がね、宿の倅が何と言うと思ったら、「あの、おばちゃん。おばちゃんは黙っているけど、話はやして、あの、お勤め人よりよっぽど、お金一杯持ってるろ」って言うから、「どうして、そういうわけにはいかないよ」。だって、ほら、荷物が宿へ一旦来るでしょう。宿の人受け取ってくれるわけさ。そうすると、だいたい見当がつくがね。でっかい荷物がさ、20個ぐらいずつ来たって直（じき）売るわけだがね。暮れになって今度はねせよう頃になるとさ、大口さんがたまげるの。あの、「加藤さんずいぶん売れるんじゃない」って言うからさ、「儲けねえで売るんだがね、それでも」。いやあ、それでもさ、やっぱりそうやって荷物が来ると宿の人がさ、「これだけの荷物が来るんだら、まあ1つにいくらくらい儲けても、そうとう儲けるな」と思うんだろう。「話はやしてな、洋服来て歩く人よりも、よっぽどおばちゃん金一杯持ってくんだろう」って笑うんだがね。

2、3年前にね、やっぱり用があって、「来い、来い」って言われてさ。そして遊びに行った時があるの。宿してたった人ね。いま、今度ね、自分で行けないから宿の人が毎年来るの。夏になるとね、来て喜んでね。「おばちゃん、まだ来られるんじゃない」って言うからさ。「とっても行けないよ、はあ、いま行けばしめしがあるんだから」。そして、あの、みんなして来るんだわ。喜んでね、あの、うちの長男とおんなじ年だからね。あの子は小さい時から行って、またおんなし宿に25年間いたったからね。あの、言うんだよね。「おばちゃん、あのおばちゃん、他人だと思わないで、あの俺は自分の親だと思ってないいつ（内意）思ってるんだから」って言って。喜んでね、夫婦して泊まって行くんだよ。

あの、親子みたいにしているのがあるの。何軒もあってね、毎年来てくれるん。親戚以上だね。それで、ほら、具合が悪い時はお見舞いやったり、亡くなったりした時は香典を送ったりするからね。やっぱり親戚以上の付き合いだね。ええ、「この商売して良かったなあ」って思っています。あんまりいい人がいてね。ほんとにそう思ってます。

ほいで、今度その人がね、夏になるとね、そこの人が親子して来てくれられるん。そうして去年もねえ、「米が買えないで困った」って言うたら。「いやあ、もっと早く言ってくればいいのに」って、米を送ってくれてね。ほいで、今年は、去年の秋だな。去年の春先送って、また去年の秋は「あの、おばさん今年は豊作だから新米送ってやるからね」って言ってね、送ってくれたの。はあ、終わってから10年も過ぎたでもね。暑中見舞いと年賀状はあの子（娘）が出してくれるからね。みんながね、やっぱり忘れないで、そして来てくれるわね。夏になるとね、こんだ便利になって会津のほうから来ると近いからね、来てくれるんだよ。まあず、親子、兄弟姉妹どころか、まああれだね、あれだったらいいと思って。米が今年は1斗ずつ5軒ぐらいよこしたかな。餅搗いて1軒よこしてね。毎年そういうふうに、毎年よこすし、夏になるとね、「おばさん、米作ってないから」って言って。「おみやげだよ」って言ってね、2斗袋くら

い車に乗せて来るんだよね。そうすると、あの、隣の人が見ててね、「おばさん、あれはどこの人、布袋は」「あれは栃木の人だ」って言ってね。やっぱりね、うらやましいって言うね。ほんとうに、あの、若い時にね、「行商、1軒1軒寄って行商するんだったら、3度の飯が2度でもいいから、これしたくねえなあ」って思っていたんだけどね。今度ね、30年も40年も行くようになってね。まあずいくら、まあ、あのあれだな、自分で何だかんだ言ったって、行商してよかったなあって思うね、いまになると。行商しなければ、あの、ああいう付き合いがないからね。

自分でつくづくそう思う。あんまりみんなが親切でね。あのね、たまに「おばさんの声聞きたいから」って電話くれるとね、ありがたいなあって思ってね。行商してよかったなあって言うんだよ。いまでもちょっと長寝る（ながねる）とね、「変わらないですか」って電話くれるんだよね。一回来た時があるけど。まあず、いい人ばかりだなあって思ってね。どの人みても、この人やな人だったなあって言うのがなかったみたいだね、いま考えると。あの人に金貸して悪かったなあって言う人がいないね。やっぱり、農家の人っていうのはね、人間が堅いからねえ、いい人だわ。

<四国旅行>

あの、忘れないけど、53の時にね、宿の人と11日、四国を回って来てね。団体がたってね、「あの、加藤さん、行かない」って言うからね。いま行かなければ行けないと思ってさ。年とってから行けないと思って、一緒に行ったんだわ。

その時は、帰って来る時に、「来年の3月に団体がたつからどう」って言うから、「じゃあその仲間に入れてくれ」って言うわけで。そいで早めに行って。1か月ね、早めに行って商いして。ここから行かないで、もう行って。商い1か月して、そして行ったの。

そうしてね、ずっと小豆島のほうからね、四国の金比羅様から。だからいま大阪に行ってさ、あれ見ると神戸の港へ着いてさ。有馬温泉に泊まって、そして来たんだよ。だから、あの時行がんば、行がんなかった。いかったなあと思って。いまになって思うと、行商してよかったなあをつくづく思うね。

<東京から疎開で戻る>

26ぐらいの時に子供が2人いるから、一旦東京に行ったんだよね。子供がいるからって言って、子供が2人になった時に東京に5年ぐらいいたったかな。5年ぐらいたってから、はあれだんだん戦争があれになってさ。そうして東京で子供が2人できて、子供が4人になって、ほいで3人目の子供がね、ちょうど戦争があれになった時に、熱病にかかってさ、そうして氷が買えないでね、一晚のうちに脳に熱が昇ってしまって、そうして弱くなったんだ。そうして、おやじが「ここにおいたんではかわいそうだから、田舎のほうがいいんじゃないか」って言うわけで、そうしてまだあの頃誰も疎開しなかったけども、疎開したの、早めに。19年の年に。でね、5年ぐらいの間、東京に行ってた時は（行商を）休んだわね。また、来て、今度子供を

連れて来て、こんだ戦争が終わって、それから本試行（ほんしこう）になったわね。あの頃まだ切符が買えないで、行けないで、むこうから「来たほうがいいでねえか」って言われても、切符が買えないで行けないでいたったの。

それから、今度、戦争が終わってからね、おやじ（夫）は会社、はよ辞めたし。それで、田舎に来たって今度仕事がないから。あの頃働く所がないからね。まんま（御飯）食っていけないからね。そして、ちっとばかり持ってきた金は使ってしまうから。そうすればね、どちらでも率のいい人が出てくることっていうことになって。私が行ったわけ。それからずっとね、行き始めて、はあ辞めないでいたったの。その時にね、何にもしないでおやじはいたっても、ほら、困るから。夏になって、部落区長にね、「あそこの磯の所へね、茶屋でもね、素茶屋みたいなものを建てたいと思うんだけど」って言ったら。「どこでも好きなとこ、おまえさんの好きなこと使えばいいが」って。その時まだ誰もしてないで。そうして簡単に借りてね。夏になると素茶屋して、1か月なら1か月いたったの。その頃はね、いまは言うけども、夏1か月でもってね、あの、これ（お金）がかからないから。1年のね、生活費がね、入るんだよね。そうして、これはいいことだなあと思って、その頃はいたったの。ほいで、はよ寒くなると、その茶屋ぶっこ（ぶっこわ）して、たたんで裏に持って来ておいてね。そうやって、何年もたたんうちに、こんだ、我も我もって言って、茶屋するでしょう。そうしたら、今度は、いまはね、経費負けしてね。いやこれはこうしなきゃあだめだとか、いやああいうふうにしなきゃあだめだとかって言ってね、金がかかってね。あの、たいへんなの。

<ブツコの生活>

あのね、米はね、そこら歩くと、農家だからブツコしたの。品物やって米貰うの、米と交換したの。そうして、野菜は百姓屋歩くとね、「おばさん」人だから持っていけ」って言ってさ。そして、そのネギでも何でも貰うでしょ。お豆腐なんかはたまに買うけども。貰った場合は、やっぱり自分で持っているものを、それ（毒消し）くれてさ。そして、だから自分でほとんど買わない。買わないたって貰ってたんだよ。

お米の場合は金がさが張るからさ、金物でもなんでも。ほとんど終戦後はね、百姓はやっぱり金出したくないでね。ブツコが多かったんだわ。あの、緋は、緋は高いから、値が張るでしょう。そうすると、米がまあずいっぱいでね。そうすると、自分で持ってられないから。間屋がいるでしょう。その間屋に頼んで持って来てもらうの。そういう時は間屋に直接それやって、そうやってたの。

百姓なんてのんきだすかいね。そんなこと（ブツコの値段が決まらないということは）ないわね。ほんの、こっちの言いなりだ。「この緋1反やるから、米このぐらい貰いたい」って言えば、「はいよ」。だから楽なんだ。「おれがここから重たいおもいして引っ張っていくんだから、ちっとよけいに貰いたい」って言えば、「はい」。みんなほとんどが（同じようにしていた）。今度、辞める頃になったら、あまりブツコというのがなかったけども。終戦後はほとんどね、百

姓は金がないから米出したがつてさ。米の袋なんて見せて歩けなかったわ。「おばさん、米で取ってくれるの」って言ってね。すぐにもね、米よこそうと思ってさ。だけど、それ取ると重たいんでしょう。だから、なるたけ金で貰いたいと思ってね。隠し隠ししてたわ。本当は、重たいでも米でするとね、儲けの率がまたいいんですけども。それ、こんだね、担いだ場合は、それから商いしねえばだめですかいね。困るんだよ。それから、こんだ考えてね、リヤカーの小さいのを拵えたの。拵えてもらって、そしてそのリヤカーに乗せて歩いたから楽だったの。遠いとこいかないがね。町内（まちうち）。1里かそこのところ。でも、米を闇屋に持っていくのがたいへんだから、ほとんど金だったね。

今度、辞める頃になったら、はあね、金になったがら、あれだわ、商いも楽だったね。そいで、辞める頃になったら、残ったら、「これ買っておけば」って、持つからね。「そんな先のやつまで買えない」なんて言ったつてさ。やっぱり「買っとけ」って言ったら、何でも言いなりで、楽だったわね。で、「おばさん、いまだって来られるんじゃあない」って言うから、「とんでもない、自分の家のなかでもやっただ」って言って。

<「嫁の働き」>

嫁の場合は、「嫁の働き」っていうのがね、だいたい決まっていると言えば悪いけどね、だいたい決めてあるから。それを一旦貰ってからシュウトメに渡すんだけど。今度は、娘で行った場合は、親の所へね、直接持って来て、親の所へ。これだけの働きを、私どもが行った場合は「小遣いはこれだけ」って言ってね、貰ったの。親方が、小遣いだらば小遣いを出して貰って、これだけ。まあ腕によってだね、商いが上手にできればそれだけのあれを一生懸命にやったからって訳で、それを親にやるの。そして、小遣いは（親方が）弟子に直接渡すの。その人が腕がよければ、やっぱりよけいくれるわね。そしてね、着る物も買ってくれるんだわ、帰る時にね。氏家から帰る時に、「これ、一生懸命にまじめにやってくれたから」って言って、着る物をね、その時その時の着る物を買ってくれるんだわ。よそ行きみたいなもの。そうして、今度、あの頃は緋だからね、緋は今度自分で行く時は、親が作ってくれるんさ。（旅に）出て行く時の用意はね、冬のうちにみんなしておくの。

（親方が弟子からいくら分け前をもらうかは）そうねえ、いいかげんなんだわね。いくら自分が一生懸命になっても、やっぱり親方によってだけどね、くれるのはいくらもくれないんだよね。あそこ、だって1年でもってね、80円ぐらいだろう。1年行つたつてね、80円ぐらいしかもらえないんだよね。そうするとさ、それではもう親方についていけば、今度は親元に出すのつてがねえ。はあ、でも、「嫁の働き」つてのがだいたい決まってるね。その頃は嫁の働きは50円ぐらいが普通だったろうかね。だから、それほどあれで（多く）ないけど。

（「嫁の働き」は）オシュウトさんとこへ出さなきゃならない。腕のいい人と腕の悪い人があって。そうすると、ほら、少ないと嫁として肩身が狭いわけだね。「あそこの嫁さん、100円ももらった」っていうのに、「おらとこの嫁は80円だ」とかさ、「50円だ」とかっていうと、そ

こちらに行って今度はシュウトが話しをするとさ、結局ね……。

（稼いできたお金は）シュウトさんがいる時はシュウトさん。それで、シュウトさんがいない場合は親父（おやじ）さん。小遣いはやってしまえば貰えないから。取って、そしてやるの。

だから親方はいっぱいほしいわけ。弟子大勢連れていけば、それだけに自分が弟子をあれしてる、1人からいくらっていうと、そうとうの利益になるわけよ。

<貰われてきた家>

（貰われてきた家の）兄弟姉妹（きょうだい）は3人。男だったんだわ。兄弟姉妹（きょうだい）は百姓だった。百姓でね、おれを育てくれたばあちゃんの相手っていうのが戦争に行っで戦死してたんだよね。戦死して、そして人手がなくてさ。その時おじいさんもいたんだよね。そして、娘が1人いてね。そうしてあの人が戦死して。そしてその次の弟と逆縁（ぎゃくえん）になったわけだよね。そうすると、今度その逆縁になった人も、まだ戦争が終わらんで、まだ戦争に行ったんだでもねえ、昔のことだから。

あの逆縁になって結婚すると、今はどうか知らんけども、あの金がもらえないでしょう。戦死の金（遺族年金）がもらえないから、年寄りの昔のおじいさんが籍を入れないで、そのまんまにして、内縁の妻にしておいたわけね、その弟の。そして、今度それも戦死したんだけども。やっぱりその時も今度子供が腹に宿っていた時に、あの、その人が戦争に行っで。今度その時には男の子ができたわけよ。それだでも、籍が入ってないから、それは私生児になっているわけ。そして、今度ね、娘が今度途中なかで具合が悪くなって、娘に婿もらってからだなあ。おれ、あれの子供の守り子（もりこ）したんだから。そうして、子供が死んで、今度その娘もねえ、死んだんだよね。そうすると、あとから弟と今度逆縁になってできたのが丈夫でいたんだけれども、そこで跡を取るわけにいかないわけね。はあ、そこ婿もらったんだから。その娘に婿もらってあるから。それを出してやって、それに跡を取るというわけにいかないわけ。そして、それはどこまでも私生児として、そうしておいたわけよ。だから、そのの、いまの家の系図というのは絶えてるわけだけども。やっぱり今度ほら、ちょうど娘に婿もらった人がよくできて一生懸命働いてねえ、やっぱりよくしてくれてる。

（私生児の人は）いや、あのね、東京に出てね。自分がほらそこにいと、やっぱり親は自分の子が可愛いから、どうしても家のなかがうまくいかないからというわけね。東京へ出て、そして自分でおれは、そのおじいちゃんが亡くなる時に、「この子供が本当はこの家の系図を引いてるんだから、大きくなったら財産をこういうふうにしてやってくれ」と言った。昔は口約束だからね、してやれないんさ。そして、それが途中なかで一人前、大人になって、財産くれてここにいと、うまくいかないからというわけね。金をもらって「自分が学校にあがれば、田舎に帰って来なくたっていいから」というわけね。あの頃の金で120円くらいもらって、そうして東京へ出たんだよね。それで、東京に行っでずっと、今度自分が、ほら自分も兵隊に行っただけね。途中なかで怪我して帰っきてたんだよね。

東京に行って、自分で苦学してたんだがさ。あのいいところに勤めてたんだわ。それだから、割りとね、いい暮らしして。いまもう子供を大学へあげてさ。そして何とか暮らしてるんだわね。いい人だったわ。ばあちゃんとよく似てたけね。とてもいい人。(その人は) 亡くなったんだよね。はあ、もう10年くらいなるかなあ。うちのおじいちゃんより1年ばっか早く亡くなった。10年ばっかになるわね。いま生きていれば85ぐらいかなあ。

あの、娘さんが亡くなって、そこへ今度ばあちゃんが実家からつれてきたんだわ。(私を引き取ってくれた) ばあちゃんの実家からつれてきて、そして入れたったからうまくいったけどね。

(育ての親の家の婿さんは) 大工だったんだ。大工で、あそこへ婿に来た頃はね、大工で。百姓だって、ここは、ほら半農半漁だからね。大工で、福島に自分の兄弟姉妹が行っててね、福島にそこへ大工に行ってたんだよ。大工なんて、まあ、それこそ、1年中とっていいくらい、ほんのね、お正月ぐらいしか帰ってこないんだわ。

(家計をまかになったのは) そうだね、大工とそれから百姓もあったこてね。そして、こんだ、そのばあちゃんのフジュウロウ(遺族年金) って言ってね、昔はいくらももらわなかった。1年にね、45円ぐらい。昔はフジュウロウって言ってね、戦死した人用におりたの。それが45円、1年に45円。

まあ、あれだね、(それだけあれば) 割りとお金持ちのほうだったよ。あのね、金持ちって言えば、あれだでもね(言いすぎるけれど)。割りといいほうだったんだよね。この村とすれば、いいほうだった。

<娘の習い事>

(冬場、角田にいる時は) やっぱり雪が降るからね、仕事ってのがないんだね。やっぱり夏の、その道具、女たちからお針したりさ。そのぐらいで、別に、そのあれだな。仕事ってのがないんだよね。山へも行ったからね。あの、いまみたいにね、山登るたってね、いまみたいにバスもなにもないから。やっぱり山の着物作ったり、全部、そのね、冬場のうちに用意したの。

やっぱり嫁に行くまでに、あの一応、そのね、紋付き羽織を縫われなくたって、普段着ぐらい縫えなければ、オシュウトさんにさ、「これを縫ってくれ」って出された時に、恥かくという頭があるからね。はあ、(嫁に) 行くまでの間(かん)に、ひととおり教えるんさ。そして、縫えるようになって。そして、いまの人はお針できねえてもいいけど。その頃はさ、オシュウトさんに「これ縫ってくれ」って出されて、反物出されて、「これ縫われません」なんて言ったら、よーくそれこそ言われるわね。「よーくそんなのが縫えないで嫁に来たな」なんて言われたらね、口が空けないからね。やっぱり冬仕事に一生懸命にね、習ったもんだよ。お針教える所がところどころに、やっぱりお針の先生がいてね、そこ行っただの。いまなんて、反対だわ。おれ嫁がね、お針できる人なんてそんな数いねえわね。嫁がシュウトに縫ってくれって言うがね。

おれはね、旅にばかり出ていたったから、人の漬けたのばかり食ったったからね、人の漬けたのばかり食べててね、漬物ができないでさ。ほんの漬物はできなかったなあ。それで、

あの、15人家族のとこのね、おかあさんは漬物上手でいられてさ。

<越後回り>

そして、一年ね、切符が買えないでね、この越後ザイに回った時があるの。あのね、白根からさ、加茂のほうからさ。ずっと、その隣のばあちゃんがね、越後ザイ回ってたったの。ばあちゃんが連れてってくれたんだ。いやあ、良かったなあって思ってね。

白根の所に、「白根の浜宿さ」言ってね。浜宿の所にいったん（一番）最初荷物を置いて。5日だら5日分だけ担いで、そいであと加茂の山ん中のほうまで行ってね、そうして戻って来たの。ずっと歩いて泊まって行ったの、百姓屋へ。まあ、越後の人はいい人だよ。ばあちゃんが言うんだ。ばあちゃんは庵寿様の所へ泊まったりさ。ばあちゃんは金物に変わらんで、葉っぱか売ってた。

<小遣い取り>

大晦日のほんのね、30日の日に戻って来るんだよね。そして、やっぱしそこらとおんなしだから。歳暮に使う物を売ろうとするすかいね、そして貸したのもあるから、その貸したのも全部貰ってこようとするからね。30日の日に帰ってくるの。そして、正月2月と居て、その間（あいだ）に全部お針したり、またほら、その次の年の用意して。そいで、3月になると雪が融けるから、そろそろね、出るんだわ。ここの祭りは4月の4日なんだわね。それが終わると出て行くんだった。茶屋が始まると、はあ7月というと帰って来てさ、茶屋の手伝いしてたからね。それまではね、お盆でも何でも戻ってこなかったんだ。茶屋をしてからね、茶屋の時は忙しいからね。茶屋が始まる頃になるとね、来て。そして終わるとすぐに行つて。

秋祭りが終わると、金物なら金物専門に持って行ったんだわ。1か月ぐらい。その時に千葉のほうにも行ったし、群馬のほうにも行ったし、岐阜のほうにも金物持って1か月ばかり行った時があるしね。どこでも行ったな。

宿はね、その時は決めてあったの。はあ、千葉行けば千葉の。岐阜のほう行けば岐阜。岐阜は親戚があつてね、そこへ泊まってたの。そして夕方になると戻って来てね。そいで、群馬行った時は駅の前にね、あれ（宿）取つて。

友だちが「おれ、おまえ今年は千葉のほうに連れて行くが」って言えば、「おし」。こんだ来年なって、その人がまた違う人と行くから、「こんだあんた違う友だちを群馬、桐生のほうに連れて行くから」って言って、そしてその人と一緒に行つて。そうやって行ったの。そいで、仕事のおばさんと、岐阜は仕事のおばさんと一緒に行ったの。一番良かったのは、桐生のほうが良かったね。あの、機場（はたば）だからね、まあ、その機（はた）の裏切りする鉄だとか、ああいうのが売れるんだわ。ほいで、千葉のほうはこんだはね、海岸縁（ぶち）のほうに行くとな、なんと言うこともねえ、出刃みたいなのがね、刺身包丁みたいのが出るんだわ。1か月間ね、友だちとそうやって行つたんだわ。1年1か月ずつ。あとはみんな栃木。あとは秋でも何でも栃木。こんだ、あの百姓はね、何も出刃みたいのが売れないで。田圃の中だから

ね、鎌だとか、包丁だとか、鋏だとか、そんなものばかり。

<注文・清算>

あの、食べ物のはね、(注文は)電話でしてやるの。ほんの便利だったが。そいで今度宅急便が流行ってきてさ、こんだ暮れになるとさ、お歳暮時になると、みんな数の子漬けだとか、わさび漬けとか、ああいうものを箱でもってするすかいね。

あのね、食べ物なんかはさ、金がさがはるからさ、自分で金が出来た時点でよけいでも(お金を)よこしておくの。そうすると、こっちに来て清算した場合によけいになっていれば戻してよこすし。はあ、帰るまでと言わずにね。「振替用紙入れてよこして」と言うとな、品物の中に入れてよこすの。そうした時に、20万でも30万でも、金が出来たらそこへ入れておくの。そうやって、あの金物とかさ、金物屋は回って来るんだよね。だから、その時金やって。その次のやつまた仕入れて。ほとんど現金みたいにして。

持って歩くとあぶないから。先々どんな人がいるか分からないから、積んで通帳にしておくな。郵便局に積みに行く。あのね、毒消しのはね、それほど金がさが張らないから、それほど局に行くこともなかったけどね。こんだ、反物売ったとか、食べ物のはね、あれだね、持って歩きたくはなかったね。そうして、重ていろ(重たいでしょう)。重ていすかい、いっぱい担がねえすかいね。やっぱり、こういういろいろあれ(総合して計算)すると、儲かるのはやっぱり薬だったわね。

あの、お盆にはね、浜茶屋が忙しいから帰ってくるの。浜茶屋がない時は、お盆に帰ってこない。帰ってこないで、春いけば10月まで帰ってこない。その時はね、お盆に来ない時は10月に来たの。そいで、10月に来て、まだその間があるから、その一か月はね、千葉のほう行ったりね、群馬のほう行ったり、あの、金物ばかりしょって、友だちどうして行った時がある。一か月ぐらい。あの、10月に来て、11月に。小遣い取りに、自分がそれは。小遣い取り。(それまでの稼ぎは)ちゃんと出すの。だけれども、10月から11月一か月は、友だちどうして行ったのは、何を買おうと、小遣い。そうしたの。

<分家の約束>

嫁に行った時、おれはオジヨメ(次三男の嫁)なんだ、わけなんだわね。それで、東京におやじ(夫)が働きに行くわけ。そうすると年の若い時に行ったんだから、親が金もろくにないのにさ、子供ができて生活が大変だから。「ここにある程度安定ができるまでここにいれば、そのほうがいいんでねえか」って言うわけだね。そして、兄嫁夫婦と親、シュウト夫婦の15人家族だったの。

東京に行った時は、私は遊んでたさ。だけれども、嫁に行った時には、大家族だったの。材木屋してて、漬物工場持ってたね、とにかく忙しかったんだよね。それだから、商いから帰って来た時に漬物工場と、それからね、材木の手伝いしてくれれば、そのようにしてやる(分家に出す)というわけなの、兄たちはね。やっぱり、こっちだっても、何もないよりも、家屋敷を

求めたほうが安心だから、そのほうがいいんでねえかっていうわけで、そこに居たったの。

それだけど、こんだ、兄たちも、私たちも子供がおんなし（同じ）ようなのが、おんなしでできるろ。そうすると、こんだ、まあ考えたわけね。その時はうまくいったって、だんだんだんだ子供がいっぱいになると、子供のことで喧嘩になった場合、いままで仲良しでいたったのが、喧嘩になってからでは始まんないから。いいかげんにして何とかやっていけるから、連れて行くというわけできて、そいで6年ぐらいで行ったんだ。決めが10年だから、6年しかないから何も貰わんで行った。決めは、10年いたら屋敷と家を建ててくれるっちゅう決めだったの。だけど、10年いないで6年で行ったから、何にも貰わないで東京に行ったわけ。そいでも東京に行った時は何とかね、勤めの場所がいかったからね。何とか食っていけるかなと思っていたった矢先、こんだ、ほれ戦争がだんだんあれになって、また帰って来るようになったの。そいだからね、ほんの裸一貫でこれ（家）求めたんだから、作ったまんま。

<大家族の生活>

15人家族の時ね、写真撮って。「なかなかね、これだけの家族がいる時がないから」と言って。あの、娘が嫁に行く時に写真撮ったのがあるの、15人家族で。長女がまだ2つぐらいの時。15人家族でね。その時はまだこういう（大きなテーブル）のがなくてさ、箱の御膳でね。箱の御膳にね、御飯のさ、夜になると茶碗洗って、そこにこうするの、ずっとそこに。親はしないけど、ねえさんと二人でするんだよね。みんなが、みんながお湯に入っている時に、それ全部洗って。そして箱御膳して、そして戸棚に乗せて。「たいへんだな」って思ってね。うちは、あそこは家族がちっとだったからね、あの大家族のところに行って。一番最初「居られるかな」って思ってね、考えたの。

（夫の親たちと一緒に居たのは）6年ぐらい。そいでね、今度二人目の子供が、いま東京にいるのができた時に、「こういう大家族じゃあね、しょがないから、何かめ事があった時に困るから」って言って、あの東京に行ったの。そんだけど、割りと兄夫婦がね、いい人なんだよね。親もいいからだけど。その15人家族でもね、なんだかんだあった時はないんだよね。ほんのいい人だったの。

だからおっきな家でさ。そうしていたった（一つの家の中で夫婦ごとに部屋に分かれて寝ていた）。15人家族っていったら、ちょっとたまげるわね。ほんだって、子供が今度はあれだ（多い）から。茶の間と中座敷とさ、やっぱり寝床だけで足らんから、そこへもやっぱりね、寝てたったの。

（大家族での生活は）たいへんだったよ。わがままだったけどね。その人がいい人でね、勤めさせてくれたの。だからいまの人はね、親をさ、私たちがほら行った時は親は親だと思っても1目（いちもく）。どんなにこれが白いものが、いまこれが黒いったってね、「ああそうですか」って言った時代だったんだよね。だからうまくいったわけ。けどもね、いまの人はね、そうでねえ。だからね、どうしたらこういうふうな世の中になったんだろうと思ってね。自分

でも考えられないでいるの。15人も、シュウト、コジュウト、兄夫婦いるところにさ、たとえ6年だって言ったって、何事もなく、毎日仕事して。そして、あのね、そやって何事もなくきたんだろう。それだって、いまの人はさ、ちっとでもね、それがなんだかんがあるでしょう。「どうしたら（どうして）、こういう世の中になったんだろう」と思うがね。そうして、いま時代があれだからしょうがないけどね。

<疎開での生活>

（当時、おとうさんは）屋根屋。コバの。むかしね、コバ屋根ってのがあったんだよね。あのコバ屋根をね。それで、あの職人頼んでさ。あのコバ剥ぐ職人を頼んでおいたの。その屋根をこうする。いまみたいに瓦の屋根じゃなくてさ。むかしはコバの屋根だったの。そして、あの、大体、あの、山から取ってきたカヤ。カヤの屋根が多かったんだがね。カヤ屋根とかコバ屋根とかが多いから、あの、コバ職人だったの。

（疎開で戻って来た時は）兄夫婦の材木屋の、その材木ゆったった所を床張って、そこにいたったの。納屋みたいなどこ。あの頃はみんなそうだからね。こっちはいいほうだったんだよ。納屋には3年いた。それで、こんだ、おやじ（夫）は働く所がないから、その漬物工場に行ってたのさ。材木の手伝いしたり、漬物工場の手伝いしたりして、ほんのあれだわ、働いたっていくらにもならなかったんだわ。

そのうちに漬物工場がだめになって、それで材木だけになったから。今度人夫がいなくなったから、その代わりにうちは、ほら、その浜茶屋っていうのをしたろ。だから、浜茶屋してて、そのほかに、また海も山もあるから、そういうものを取ったりして。おやじはおやじなりの働きをするし。私はこんだ子供を置いて行くんだから。子供を見ながら夏場は浜茶屋。また工場が忙しい時にはたまにね、使って。そのぐらいだから、商いに行ってきたのはみんな生活費だったわね。この部落は、ほとんど女の働きのほうが強かったんだわ。

毒消しで稼いだ金はむしろ生活費。それから、だんだんだんだん、これ今年は浜茶屋でなんとか生活費があるし。こっちのほうが商いして持って来たんだから、これ壁塗ろうかなと思うと、あのもんがねえ、具合が悪うなって全部使ってしまってさ。なくなっちゃうんだね。そうやって、まあ繰り返してね、この家建ってから、この壁塗って畳入れたのが8年目に。苦労したわけ。だから、ほかの人はみんなりっぱでね、家建ててもね、やっぱりいろいろの方面から金が入るけど。うちはね、裸一貫で、ほんの、あの頃で、この土地を買うのをギリギリにして来たからね。いつになってもおんなしだ、金がなくて。

うちはね、畑も何もなかったでしょう、疎開人だから。それで、来た時に、ほら、村の人がさ、村の畑を疎開者に、「何もないと困るから」って言ってね。野菜もん作るだけは（畑を）貸してくれてね。ダイコンやジャガイモ作るくらいでね。あと、余るほど作る所はないんだよね。

<塩焚き>

塩ね、取ったの。塩を作りたいへんだったわ。疎開して来たら。組でやったよ。何組、

何組って言ってね、その浜の場所を分けるの。塩をこうするから、上（かみ）のほうからさ。1組、2組ってずっと割ってきて、あの磯のほうからずっと割ってきて、うちのほうは下（しも）のほうだからね、12組だったの。12組しかなかったれな。いまでも12組かな。

あれや、塩を干した時はさ、どうしたんだったっかな。あの、塩を、忘れたれや。塩を干してさ、あの煮つめたのを（組の仲間で）分けたんだか、どうしたんだか。自分たち個人でした時は、あそこの海岸のところに釜をしてさ。そうして1日のうちに、はあ、そのかわり夜中になるんだ、塩があがるのに。

塩の時は一番良かったが、骨がおれるけどね。塩と米と取り替えるんだよね。米持って行くんだ、塩がほしくて。あの長岡のほうからも来たれなあ。あの夫婦で来て、あの弁当持って来てやね、「今度、いつ、いつかの時に行くから」って言って手紙よこすと、今度あの人に来てさ、塩が取れば米でもなんでも自分の好きなものが手に入るろ。（売って歩いたのは）西川町のあたりだな。あと、巻のザイの今井だとか、漆山に行った程度かね。

<近所付き合い>

そいで、お寺に行くけど、商いに行ってる頃はね、御経会（おきょうかい）はなかったしね。お寺と行ったり来たりってのがなくて。そうすると結局、願正寺は村中入るし。こんだ妙光寺さんは隣組なんだよね。子供の時からどうしても妙光寺さんの子供と遊んだからね。妙光寺さんのほうへお寺が違って、あの宗教が違って、妙光寺さんのほうに行くことが多いんだよね。妙光寺さんの子供も、いま東京から帰ってきててもね、うちにすぐ来るんだよね。だから、ほらいまの御前様さんだっても小さい時なんてね、ほとんどほら、いま東京にいるのがおんぶしたのが、奥さんがさ、あそこへお使いに行く時になると、「おいてぐ」って言うからね。あの「うちだって子供がいっぱいいるのにさ」。あの、「あんたうちの子供おぶっていけばいいがねさ」って言うよね。「いや、おぶっていぐとね、来る時にね、荷物があるからね、見てて」って言うから。おれまたわざと、「奥さん見てねえ時つねって泣かせるんだろうさ」言うとき。「いや、おれが見てねえ時泣かせたも（ても）いいから」と言って、いやもう置いていくんだもんね。そうすると、まあずせつながって、貞子（娘）が自分の身体が小さいってがに（いうのに）、あの子ことおんぶして。おんぶしたのも泣けば、おぶった人も泣いて、まあ「こんだあしたから、置いて行ったらば、文句たれてやれ」、そう思ってね。毎日そうやってうちのようにして、行ったり来たりしてたったの。そいで、この先代の御前様も、あのどっかに法事に行ってくるかね、かならずうちへ寄ってさ、ちょっと休んでいくわけ。そんげえしたの。何軒もなかったの、うちが。ここからお寺までね、なかったの。そうだから、ほとんどうちへ来てさ、あれしてたったすけ。やっぱりそのくせが止まんでね。はあどうしても願正寺よりもこっちのほうが見るいんだがね、お寺のなかでも、何でも。

<墓参り>

（お盆にお墓参りには）行かなかったね。お念仏さんがいないから、いかなかったの。じいちゃ

んがチュウキで寝たきりになってからは、行商にはいかなかった。

あのね、オコリカエシが起こるまでは、そいでもまだずっと遊びに歩いたからさ。その頃はちっとは（行商に）行ったけど、あんまりね。こんだ、その、ほら、日にちを長くいないで。1か月やそこらぐらい行って戻ってきたの。（亡くなってからは）でない。こんだは、オコリカエシがでてからね、そこで危ないからと思ってね。そいで、行かなくなったの。昭和58年頃からかな。

<山菜・薬草取り>

（通院していた時、医者が山菜をほしいう言う）「いや、（山菜を）もらいてえな」「そうさ（それなら）、持ってけばいいのに」って言うのと、先生は「おかしい」って。「ばあちゃんいくつになった」「いくつだか分からんでな」「年は」「年はまちごうた（間違う）んでねえかね」「おまえ、80だせ、山のとっぺんまで行ってくるね」って、笑うんだ。

（キノコ取りに角田山に登ったのは）小さい時から。キノコ取りでも、タケノコ取りでもね、山で好きで、何べん、山へ、ここの、あんまりむこう遠いとこ行かんねえ。ここの角田山ならばね、ほとんど行く。

薬草ったってね、オーレンぐらいだ。オーレンか、それとドクダミとね、自分の使い用だけ。あの、ゲンノショウコウとかね。また、自分で、ほら飲まんでもねえ、人がまた「くれさ」言う時ととくとね、またやって喜ばれる。（小さい時から）親がね、育ててくれた親がやっぱりそういうのが、ゲンノショウコウだとかさ、ドクダミだのオーレン取って、陰干しにして。そうして、そういうのばっかり使ってたからね。やっぱりそれを覚えてて。連れて行っただよ。まあやっぱり山が好きでね。あの、山芋掘りでも何でもね。ヨリメ取ったりさ、連れて行ってもらったの。そうだから、山好きだから、海よりも。

（薬草を煎じて飲む時は）あのね、にがいほど入れないでさ、ちっと入れて、そしてちょうどお茶の濃いめのぐらいの程度にして飲むとね、まあ身体の調子はいいな。その人の体質もあるけどね。

あのね、いまでもね、やっぱりね、風邪引くとね、医者の薬より自分が売ったのを飲むんでね。金証丸だの毒消しは、やっぱりね、なんだかあたりものしたみたいだと思うと、そういう毒消し飲んで。そいで、ほかの薬、薬局から買うて（こうて）ね、飲まん。ほかの人みたいに、薬はあまり飲まん。

Ⅲ まとめ

前節では、加藤キクさんの毒消し売りの生活史を彼女の語るままに見てきた。被調査者の語るままに記述してきたのは、その人の考え方や生き方は土地の言葉でしか表現することはできないという考えに基づいている。と同時に、広く多くの人に資料それ自体として利用することができるように提示しておくことを重視したからである。以下では、加藤さんの生活史を検討

し、その社会経済的特徴を整理しておきたい。

まずキクさんの行商の軌跡を整理しておこう。始めは弟子として東京に行ったが脚気になり、翌年から行商先を栃木の氏家に変えて、そこを中心にして結婚後も行商を続けてきた。結婚後は6年間夫の両親、兄家族と同居生活をしていたが、子供が大きくなるのに伴って東京に働きに出た。東京では夫が勤めに出て、キクさんは東京での5年間は行商を休んでいた。その後、疎開で角田浜に戻った後は、夫の実家の納屋に住み、その後独立して自分の家を構えた。その間、汽車の切符が変えないために1年だけ知り合いの人に連れて行って貰って越後を回った。毒消し売りは4月の春祭りが終わって旅立ち、10月の秋祭りまでには帰ることになっていた。しかし、秋祭りが終わってから、大晦日の前日まで1か月程行商を続けた。その間、3年間だけ千葉や群馬、岐阜を金物売って歩いた。その後は、金物や乾物、緋の着物を持って栃木の氏家を中心に行商してきた。

キクさんは、薬は村で製造しているどの家からも買っている。そして、薬の代金は秋に帰ってきてから製造している家の本元（ほんもと）に支払う習慣になっていた。旅先で薬が不足したら手紙を出して送ってもらった。薬代を支払うことを「元払い（もとばらい）」³⁾と言ったが、「元払い」の後に製造元で売り子を集めて宴会（カクセツ・ナカゲ）⁴⁾がおこなわれた。また、行商の間はキクさんの家には仏がいなかったこともあって、夏のお盆にお墓参りに帰省することはなかった。

彼女の一年間の生活は、毒消しの行商を軸にして回っている。すなわち、春祭りが終わって行商に出かけ、秋祭りの前に戻ってくる。行商に旅立つ前には、薬の製造元から薬を仕入れ、帰ってから代金を支払う「元払い」と宴会がある。毒消しに出発する日は地域ごとに決められていた。そして、秋祭り後も大晦日まで再び行商に出かけて行く。帰って来てからは、行商に出かける準備の繕い物をして冬の間を過ごしていた。このように、行商が一年間の時を刻む生活を送っていたのである。

次に、親方弟子関係について整理しておくことにしたい。毒消し売りは始めに親方の弟子になって親方に付いて行くことから始まる。キクさんは小学校を5年で中退した後、数年間は田畑の手伝いをしたり、妹の子守をしていた。そのため、16歳になって初めて東京に毒消し売りに出た。しかし、足が脚気になり、翌年から栃木に行く。前の親方から承諾を得て別の親方に付いたのである。これは、事情があれば、行き先や親方を変えることがあったことを物語っている⁵⁾。そうして、弟子は3年位で親方のもとを離れて一人立ちをしたのである。

終戦後はどの家もお金がありませんで、農家とは着物と米とを物々交換（ブツコ）した⁶⁾。荷物を置く宿の家は決まっていて、そこから10日分位の薬を担いで農家を泊まり歩いて毒消しを売った。泊まった家では、毒消しを少しずつ御礼に渡したほかに、雑巾掛けや鍋釜を洗ったり、家事全般を手伝った。それは、親方が弟子に躰を厳しく教えたからである。「あのね、忙しい時に泊めて貰ってお客様になっていると、『お客様になっていられるものをまあ泊められ

ない』って言うことになるから、そういうことがないように、子供がいたら子供をおんぶしてやるとか、お掃除をしてやるとか、何でもそのね、ただ今日はくたびれたからっていいで、何でも手伝ってやるのよ』って親方に教えられたことを述懐している。そのため、むしろ泊まってほしいと希望する農家がたくさんあり、宿を探すことはそれほど不自由しなかったようである。そのほか、行商する側にとっては少しでもお金の節約に努める必要があり、お金を支払う代わりに家事を手伝うことの利点があったのである。

ところで、村の人が親方のところに娘たちの評判を聞きに行き、嫁を選ぶ参考にしていた。村人が娘の毒消し売りの状況によって嫁を選んでいたことは、嫁としての諸条件を毒消しの行商が培っていたことを窺わせる。たとえば、行商中には化粧してはいけないとか男といい仲になってはいけないとかの決まりがあって、これを破ると厳しい制裁が加えられた⁷¹。このように、毒消しの行商は、勤勉、忍耐、質素、儉約を培うので、働き者で従順な嫁を選ぶのに都合がよかったのである。娘に躰が厳しく求められたのは、女性が嫁として「家」を底辺で支えることが求められていたからである。

その後、泊まり歩いて宿を取ることはなくなり、宿を町場に固定してそこから歩いて行商するようになった。氏家には馬市があり、博労が泊まっていた隠居屋が空いていて、そこを借りて住んでいた。戦後は、行商をして歩く人も少なくなり、宿から行ける範囲内を回っていても、十分商売が成り立ったのである。そして、宿は仲間数人で借りて共同生活をしていた。行商の形態には、東京以外の場所に主として見られたように、農家を泊まり歩いて売るものと、主として東京にみられたように、宿を中心にして毎日売って歩くものがあった。彼女の場合、前者の形態から後者の形態へと歴史的に推移した様子が窺える。

次に、親方弟子関係の内実を見てみよう。キクさんは弟子を辞めて親方に一人立ちをすることを告げたい、それによって親方は機嫌を害し、その後弟子との付き合いをしなくなった。それをハナブッタと述べている⁸¹。弟子を辞めた場合のほとんどが同様にハナブッタわけではないが、両者の仲が悪くなることがあったことが分かる。いずれにしろ弟子が来年からは一人で行くと言えば、それで弟子を辞められたのである。そのほか、親方が毎年行商が終わって帰る時に弟子によそ行きに着物をくれたことは、親方から弟子に対して一年間ごろうさんという意味があることに加えて、来年もまたよろしく頼むという意味が込められている。すなわち、親方が弟子にあげる着物は、弟子を繋ぎ留めておくために示される親方の気前のよさが象徴的に表わされているのである。

毒消し売りは親方が弟子を連れて歩き、いろいろなことを教えて育てていくが、しばしば自分の実の娘や親類の娘を連れて歩く。そのため、しばしば毒消しを売る「縄張り」は親方から弟子へと継承されるが、弟子は直接親方の「縄張り」を荒らさないようにお得意さんを作っていくため、直接「縄張り」を犯すことはない。「縄張り」意識については、親方のお得意は回らないというモラルを持って一人立ちしていたのである。お得意さんが直接継承されるのは、弟

子が実の娘である場合にほとんど限られる。それゆえ、親方弟子関係で確認しておきたいことは、まず家の系譜関係とは関係なく毒消しの「縄張り」が形成されていることである。たとえば、キクさんが嫁に行った先を見ると、義理の母親が千葉県の松戸を、兄嫁が千葉の九十九里の海岸部を、そして自分が栃木県の氏家をそれぞれ行商していた。他方、キクさんは自分の娘と2年間、娘が病気になるまで連れて歩いていた。

さらに、毒消し売りの親方弟子関係は、弟子を辞めて以降はその関係が解消されているということも注目される。というのは、親方弟子関係は従来の親方子方関係のような庇護奉仕関係を形成していないからである。たとえば、角田浜西隣の五ヶ浜においては弟子は親方と気が合わなければ容易に親方を変更しているし、またそういう人が多くいるが⁹⁾、これは親方弟子関係が親方子方関係を形成していないことを端的に物語っている。

毒消し売りは、新潟市で講習会を受け鑑札をもらうようになってから毒消し売りを辞める人が増えている¹⁰⁾。というのは、講習会を受けて鑑札をもらわなければならないばかりか、それをもたらうのにお金がかかるようになったからである。昭和30年代は、薬局が各地にできて、売上げが伸び悩む時期にあったし、また既に金物や乾物、衣類などの唐物も持って行商していたため、毒消しにのみ依存しなくてもよかったことが、こうした背景に窺える¹¹⁾。加藤さんは勉強してこなかったのが文字の読み書きができず、鑑札を貰う講習会に参加することをあきらめ、毒消し売りから金物や乾物売りに転じている。加藤さんのように毒消しを辞めて以降も行商を続けた人々は、主として金物や乾物、衣料を売って歩いていたのである。また、キクさんの夫が角田浜で素茶屋をし始めたが、角田浜では昭和35年頃から浜茶屋が次第に増加しているから¹²⁾、キクさんの家の素茶屋はこの頃始められたものと思われる。夏に浜茶屋を営むようになって以降は、浜茶屋が忙しい時期に一旦戻り、お盆過ぎに手が空くようになってから再び行商に出ている。そのようにして、夫が病床に伏すまで続けられたのである。その時は、既に齢71に達していた。

ところで、「嫁の働き」があることについて次のように述べている。「オシュウトさんとこへ出さなきゃならない。腕のいい人と腕の悪い人があって、そうすると、ほら、少ないと嫁として肩身が狭いわけだね。『あそこの嫁さん、100円ももらった』っていうのに、『おらとこの嫁は80円だ』とかさ、『50円だ』とかっていうと、そこらに行って今度はシュウトが話しをするとさ」。このように、嫁は稼いできたお金のなかから相当な金額をシュウトに渡している。これを「嫁の働き」と呼んだわけであるが、こうした呼び方は村人が強く「家」意識を持っていたことを示している。そして、「嫁の働き」にはシュウトの世間話という相場を決定する場があり、それによって嫁の評価がなされたのである。日常生活においては、嫁は御飯を食べるのもお風呂に入るのも家族のなかで最後であった。そして、如上のような「嫁の働き」は、とりわけ嫁に最も辛いものであったのである。こうした姿は、庶民の生活のなかに家制度が浸透している具体的な姿を示している。

その一方で、秋祭り以降の行商の収入は、シュウトに渡す必要がなく、自分の小遣いになった。小遣いになったといっても、個人で使うわけではなく、子供のものなどを買ひ、残ったお金は何かの時に備えて貯金しておいている。キクさんの場合は、昭和29年に家を建てて夫の実家から離れてからはシュウトがいなくなったので、それ以降は「嫁の働き」はなくなったわけである。にもかかわらず、かくも「嫁の働き」を強調していることは、農家の女性がいかに嫁として辛い生活を送らざるを得なかったのかを身に沁みているからである。その点、庶民のなかでもとりわけ農家に家制度が深く浸透していたことは確かである。反対に、分家しなかった次三男の家の大半は非農家であり、農家の場合とは異なって家制度が浸透する基盤が欠けていた側面も少なくなかったのである。

さて、このような毒消しの行商は、先の事例においても既に見られたように¹³⁾、人と人との信頼で成り立っていることが分かる。毒消し売りから金物や乾物へと商い物が変わっても、それまでの信用の上に立っておこなわれている。金物の行商にあたって、「買う人も長年のあれだから、信用してる」、「鎌一丁にさ、600円も700円もかぶせてやったって、『はいはい』さって買う」と受けとめている。このように、行商がお互いの信用の上に築かれていることが知られる。

そして、そうした信頼関係は、キクさんとお得意さんや宿を借りた人からは、「おばちゃん、あのおばちゃん、他人だと思わないで、あの俺は自分の親だと思ってないいつ（内意）思ってるんだから」と言われているように、その関係は「親類以上の付き合い」をしている。毎年賀状や暑中見舞いの葉書を出したり、角田浜に遊びに来たり、昨年には米が容易に手に入らない時や反対に豊作の時に、米を持って来てくれている。また、行商中では、お得意さんに誘われて四国旅行に出かけている。このように、お得意さんや宿の人が行商を辞めてからも遊びに来ることは、先に取り上げた篠田さんの場合にも見られたことであるが、キクさんの場合は「親戚以上の付き合い」に発展している。キクさんは若い時は、「3度の飯が2度でもいいから、これ（行商）したくねえなあ」と思っていたが、行商を辞めた頃には「いまになって思うと、行商してよかったなあ」と思っている¹⁴⁾。「行商してよかったなあ」と言わしめているのは、何といたってもお得意さんや宿の人たちとの「親戚以上の付き合い」をしてきたからである。こうした付き合いは信頼関係の上に成り立っており、現代の商売に見られる単なる金銭の取引関係に還元することはできない。

しかしながら、「行商してよかった」という気持ちは、お得意さんと「親戚以上の付き合い」をしたからという説明だけでは不十分である。こうした信頼関係がからかいあう関係であることと深くつながっていることに注目する必要があるだろう。毒消し売りは、女性が大きな荷物を背負って遠くから売りに来ているとイメージで必ずしも受け取られていたわけではない。彼女はむしろそれを否定して、その反対に「商いに出ないとお嫁さんに貰う人がいない」とか「そうとう儲けているな」と受け取られ、からかわれている。こうした受け取られ方は、行商

がこれまでの間に何十年にも渡って続いてきたため、みんなが既に毒消し売りについて知っていたという事情があることは言うまでもない。しかしながら、それ以上に注目されることは、お得意さんや宿の人たちと、こうした気取りのない、からかいあう会話をしていたということである。

しかしながら、こうしたからかいあう関係は、行商それ自体が作り出している文化であるとは言えない。というのは、彼女は医者やお寺様の奥さん、あるいは村人どうしの間でも互いに冷やかしたり、からかったりしているからである。それは、妙光寺の奥さんとの会話に典型的に見られるように、彼女たちのたくましい生活の一端を表している。そうした女性たちのたくましが、まさしく行商を支え、「家」を支えていたのである。このからかいあう関係については、さらに今後多角的に検討する必要があるであろう。

そして、何よりも「行商してよかった」と言わしめているものこそ、行商がいまの自分とこにちの自分の家を築いているという気持ちである。毒消しを中心とする行商は、彼女にとって決して過去の通り過ぎたむかしの話しではなく、いまの自分と生活を作ってきたという思いがあり、いまに生きられている出来事なのである。彼女の気持ちのなかで行商が時を超えていまに生きている。それゆえにこそ、「行商してよかった」という気持ちを持っているのである。

反対に、行商をしていて一番困ったことは、キクさんは「自分の名前もろくに書けない」ことだと述べている。それゆえ、自分の子供には学校に行かせたいと思ったが、現実には「貧乏しててね、学校もあげられ」なかったのである。文字の読み書きができないため、注文する手紙は誰かに書いてもらっていたし、不在者投票も別の人に書いてもらっている。また、その後毒消しの行商を続けるためには講習会を受講しなければならず、文字の読み書きができないことが毒消しの行商をあきらめるきっかけになっている。当時の女性は男性とは違って尋常小学校を中退するか、卒業するのが大半であり、文字の読み書きは困難であったのである。

これまでの調査によると¹⁵⁾、大正5年以前に生まれた女性は33人いて、そのうちお寺と東京に出て看護学校を出た人（続柄は次女）、それと戦後移住してきた元教員の3人を除く30人全員が尋常小学校中退もしくは卒業であった（「学校には行っていない」と答えた2人は小学校中退とみなした）。他方、男性を見ると、大正5年以前生まれの人は15人いて、そのうち尋常小学校卒が7人、高等科（高等小学校）卒が6人、大学卒（お寺の住職）が1人、不明が1人（明治39年生まれの人）いる。このように、大正5年生まれ以前の人の学歴は、男女間に著しい差が顕著に見られる。しかし、大正5年生まれ以降の男女の学歴を比較すると、女性も少しずつ高等科に進学する者がでていて、男女差はほとんど見られなくなる。このような「目に一丁字もない」人々が、どのような「行商文化」を築いてきたのかを明らかにすることが、まさしく本研究の課題をなしている。

ところで、キクさんは4歳の時に角田浜の家に貰われてきた、いわゆるモライゴである。これまでの調査では、巻町の浜の人々はむかしから農村のザイから小さな子供を貰う慣習があっ

たことが知られているが、なかでも後妻を貰った場合に先妻の子供をモライゴとして出すことが多いと思われる。キクさんの場合は父親が亡くなったため母親が離婚してモライゴに出されたのであるから、この型の変形であると言える。このほかには、シオダンナに紹介されてモライゴを貰う場合があった。彼女は、「子供が多い人に限って子供をもらっていない」とし、「子供が少ない人が（モライゴを）主に貰ったんだよね」と説明している。この説明は、稼ぎ手が足りないからモライゴを貰うと言うことであり、モライゴを貰っている側の人の論理である。反対に、モライゴを出す側にとっては、その子を家に置いておくことが困難であるがゆえに、モライゴとしてよその家に出しているのである。モライゴは子供を出す側にとっても、反対に貰う側にとっても、「家」原理に基づくものであることが分かる。

モライゴと生家との付き合いは、貰ってきた家が子供が大きくなるまで言わないことが多く、生家との付き合いが一生ないことが多いと思われる。彼女の場合も、娘さんの話によると、「おじさんが言っていたよ。9歳の時につれ戻しに來たけれども、『やだ』って言ったと、着物持って來たけれども」と言うことである。しかしその後、夫の葬式に生家の人が出席したのを機に、彼女の生家との付き合いが始まっている。これは、新しい時代における兄弟姉妹の付き合いを示唆しているように思われる。

キクさんの生活史を振り返ってみると、彼女の夫が次男（オジ）であることが大きく影響を及ぼしている。結婚後、最初は義理の両親と兄家族らと一緒に同居生活を送っていた。15人の大家族で、つごう6年間同居していた。大家族のなかで、シュウトの言うことに逆らわず、言うことを聞いてきたからこそ円満にやってこれたのである。「その人がいい人でね、勤めさせてくれたの。だからいまの人はね、親をさ、私たちがほら行った時は親は親だと思っても一目（いちもく）、どんなにこれが白いものが、いまこれが黒いったってね、『ああそうですか』って言った時代だったんだよね。だからうまくいったわけ」。こうした何を置いても親の言うことに逆らわずに従う姿勢は、「家」を維持発展させるために「家」の成員が自己を捨てて「家」に尽くす姿を表している。しかしながら、その成員は「みんながいい人」だったので勤まったという意識を持っている。これを「勤めさせてくれたの」とキクさんは表現している。こうした意識は、親方に一番最初は連れて来てもらったと思を感じ、親方の娘と宿を共同している姿のなかにも窺えるわけであるが、恩や義理を大切にする規範が意識の根底にあると言えるだろう。また、毒消し売りはお客の人柄を見抜きながら、宿を探したり薬を売ってお得意様を作ってきたが、彼女たちが使う符牒にジョコガイイと言う言葉がある。この言葉が意味するところは「根性がいい」ということである。この人は「ジョコガジョワイ（根性が悪い）」などと客の前で話していたそうである。このように、毒消し売りは恩や義理、根性（性格）のよさを大切にしていたのであり、それによって商売が成り立っていたのである。

また、10年同居して手伝え家屋敷を建てて貰うことを兄たちと約束していたが、これは兄弟姉妹が親の財産を均分に相続することなく、跡を継ぐ長男が全部一括して相続していること

を示している¹⁶⁾。そして、10年後に家屋敷を分与する約束は父親との間ではなく兄との間で取り交わされている。ということは、親が親権として次男に家屋敷を分与するのではなくて、兄が家長として分与しているということを示している。角田浜の旧家では隠居部屋があり、父親が60歳を過ぎ長男が結婚すると、父親は長男に家長権を譲って隠居してきたことがこれまでの調査から分かっている。この場合もこうしたケースの一つであろう。この当時親が隠居し、長男が家長権を有しているという事実は、近代日本の国家が作った家制度が深く庶民の生活に影響を与えたのかを物語っており、その具体的な姿を表わしている。

その後、東京から角田に疎開して来て、キクさん一家が夫の実家の納屋に住んでいたようなことは、日本各地でしばしば見られたことであった。彼女自身、疎開してきたほかの人より条件がいい所に住んでいたと回想している。そして、疎開後は、東京に出て行く以前と同様に、夫はお兄さんの手伝いをしながら暮らしを立てた。このように、次男家族が実家に身を寄せて、親や兄の仕事を手伝いながら生計を立てていたことは、当時の「家」が親族の生活を補償する機能を備えていたことを物語っている。

キクさんが貰われてきた家では、婿の兄弟姉妹が福島で大工をしていたので、それを頼って婿が大工の出稼ぎに出て行っていた。出稼ぎに行く所は北海道から東北、関東、それに長野県がほとんどであったが、角田浜に限らずこの周囲一帯の浜の男は、近世後期には既に大工の出稼ぎに出ていたのである¹⁷⁾。そうして、正月だけ実家に戻って来て、その時稼いだお金を家に出すことになっていたが、お盆の上にチャリンとわずかなお金しかなかったと述べているおばあさんもいた。男は出稼ぎ先で酒を飲み、酒代に大半のお金を使ってしまうお金が貯まらないのである。

近代国家は「男は外、女は家庭」という性（セクシャリティ）による分業の秩序化を通して家の再編をおこなったが¹⁸⁾、キクさんが「率のいい人が出る」と言っているように、多くの農漁民は東京の下層労働者と同様に¹⁹⁾、この当時性による家の再編が十分浸透しなかった様子を窺い知ることができる。

そのほか、むかしの家を理解する上で注目されることは、貰われてきた家ではキクさんの祖父母の代に、嫁いで来た人が夫が戦死して弟と「逆縁」したことがあったこと、そして遺族年金（フジュウロウ）を貰うために生まれた子供を届けないでいたために私生児がいたことである。こうしたことは、明治時代はいま以上に「家」の継承が重要であったという事実を表わしている。そして、こうした姿は明治時代における家制度が庶民生活に及ぼした具体的な姿であった。時代は急速に民衆を戦争に巻き込んでいくことになるが、こうしたことは戦争によって人生をこうした形で犠牲にされた人々が少なくなかったことを物語っている。その私生児の人は、その当時のお金で120円を渡されて、東京に出て行き、家の跡を継ぐことができなかった。こうした方法は、キクさんの祖父母の時代において、財産を分割せずに一括して世襲するという家制度の一面と一子残留によって家を継承するという家制度の一面を同時に解決する一

つの道であったのである。

塩焚きに関しては、組を作って塩釜を共有したり、あるいは各家々が個人的に釜を所有していたりして、塩を農村に売りに歩いていたことが知られる。塩を売った先は、農業をしていて塩を売り歩いていた家とは事情を異にしている。先に農業をしていた篠田さんの場合は、ザイの農村に持っていった塩や野菜などを大きな農家（シオダンナ）が買ってくれたわけであるが²⁰、加藤さんの場合はそうではない。キクさんはシオダンナという言葉を開いたことがないと述べているように、農村のザイにおいて塩と米を交換する家が決まっていたわけではなく、いろいろな家に少しずつ塩と米を交換して歩いたのである。このように、塩を売る方法には、農業を営んでいる家の場合は農村のザイにシオダンナがいて、その家を中心にまわって塩と米を交換していたが、農業をしていない家の場合にはシオダンナがいないために、塩と米を少しずつ交換して歩いたのである。また、こちらから塩を持っていらずに、長岡などからも米を持って塩と交換に来る人がいた。

お参りに関しては、弥彦さんとか村の熊野神社には出かける前にお参りに行っている。しかし、そのほかの神社仏閣にはお参りには行っていない。弥彦様と熊野神社は村の人がみんな祈願に行っているので、自分も一緒に連れだって行っているに過ぎない。キクさん自身はあまり「信心深くない」と述べているように、行商に歩くから必ずしも信心深くなるとは限らないことが知られるであろう。また、夫は召集されずに済んだわけであるが、彼女はそれを運がいいとは考えていない。そうした運の善し悪しで説明することは一度として聞かれなかった。また、篠田さんのように、「せつない」という気持ちも聞かれなかった。それについては、彼女の「信心深くない」個人的な性格もさることながら、ここでは彼女が家制度から解放された生活を送ってきたことが背景にはあることを指摘しておきたい。

ところで、一年間の生活のサイクルは、毒消し売りを中心に織りなされていたわけであるが、その毒消し売りは春祭りが終わってから旅立ち、秋祭り前に帰って来るのが村々の習わしであった。村祭りには何はさておき、出稼ぎしている者にも出席することが要求されたのである。この事実、村落が出稼ぎ者の行動を強く規定していたことを物語っている。と同時に、村祭りが村にとって、つまり村人にとってきわめて重要なものであることを示唆している。

キクさんの家が初めて浜茶屋を経営していた頃はほかに浜茶屋もなく、夏の1か月で1年間食べていけるだけの収入があった。しかし、その後次第に浜茶屋が増えていき、現在51軒が浜茶屋を経営するに至っている。そして、浜茶屋を経営している人たちは、連れだって一緒にお参りしている。娘さんの話によると、「グループで行って、水の事故がないようにとかね。終わったら商いがあろうがなかろうが御札参りする。遊びがてら気楽にお参り。弥彦様と商いの神様という、このへんでは宝徳神社ね。11月（2日の夜）にお宮さんの（宝徳様の）お祭りがあるんですよ。村の神社は各自で。弥彦とか稲荷神社はグループで。……5月ですね。福島の大山神社に行ったり、団体で行くとか。茶屋に関係した人が、商売で。御札を貰って来るん

だよ。右習えで行っちゃうんだよね。大山さん行ったり。宝徳稲荷、越路町の。こうずっとコースになって行っちゃうんだわね。朝早く出て夜帰って来る。浜茶屋は8月の末か9月の始めで終わるから。まあまあ無事に事故もなく続けていられるのだから、ご利益があるんだろうね。お参りした当時、昭和57年頃が浜茶屋は（景気が）よかった」。

この説明から知られることは、まず浜茶屋をしている人たちは、毎年連れだって5月と11月の年2回、福島の大山神社と越路町の宝徳神社にお参りに行っていること、そしてこのお参りは信心深いか否かに関係なく、会員相互の親睦を兼ねた旅行として続けられていることである。商売の形態は変わっても、お参りする姿は親睦を図るという機能を持ちつつ続いているのである。

また、キクさんは角田で製造している家全部から少しずつ仕入れていたが、こうしたことは村中の「どの家との付き合いも大事」にしている様子が知られる。こうした意識は、村人の普段の心掛けであった。村人は家々を互いに支えあって暮らしているものであり、普段の日常生活の意識としてはこのような意識を持っていたのである。なお、キクさんの話から、村の共有地が土地がない人に貸されていること、および疎開者には村が野菜を作る土地を貸してくれたことが知られるが、これらは村落機能が強く働いていることを示している。しかしながら、この村落の構造の諸側面については、改めて稿を起こして考察する必要がある、ここでは触れるのみにとどめることにしたい。

付記

調査は1993年11月と95年1月の2回に渡って実施した。1回目に参加した者は、筆者のほかには新潟大学文学部の斎川美佳さんと久保智弥君であった。2回目は筆者1人で実施した。調査に快く応じていただいた加藤さんの御家族の方々とこれまでの調査に御理解と御協力をいただいている区長の小川敏夫氏に感謝申し上げたい。

註

- 1) 本稿はすべて仮名を用いている。また、調査は二日に及んでいるため、重複する所を省いたり、話の流れに沿って編集し直している。なお、方言は（ ）内に標準語を記し、文脈が分からない所は（ ）内に説明を補うとともに、話題が分かりやすいように＜ ＞内に見出しを付けた。
- 2) 先に取り上げた事例および調査研究の問題意識については、拙稿「毒消し売りの生活史（1）」（『環日本海地域比較史研究』第3号、新潟大学環日本海地域比較史研究会、1994年）を参考されたい。
- 3) 拙稿を参照されたい。
- 4) 越前浜でも、この製造元の宴会をカクセツと呼んでいた（西蒲原郡第五区教員協議会『郷土の展望』昭和12年、53ページ）。
- 5) 角田浜では親方を変えることはそれほど多くはないと思われるが、これまでの五ヶ浜の調査では、親方は気が合わなければ簡単に変えたし、だいたいの方は親方を変えた（1988年度の新潟大学文学部社

- 会学実習Ⅱ・文化人類学実習の調査)。五ヶ浜の毒消し売りの親方弟子関係は、その特徴を顕在的に示しているように思われる。また、角田浜では親方を減多に変えなかったという意見もある(斉藤順作『村・家・人』巻町双書16、昭和46年、28ページ)。
- 6) ブツコという方言は『大正時代の新潟県西蒲原郡方言』(巻町双書33、昭和63年)には掲載されていない。
- 7) 毒消しの行商で問題を起こした場合には、村や組合から罰金や薬を渡さないなどの制裁が科され、村に居られなくなる(『新潟毎日新聞』昭和11年5月19日付)。
- 8) ハナブッタという方言も『大正時代の新潟県西蒲原郡方言』には掲載されていない。
- 9) 1988年度の新潟大学人文学部社会学実習Ⅱ・文化人類学実習での調査による。
- 10) 昭和34年に売り子が結成していた「越後配置家庭薬商業協同組合」は解散し、翌35年に薬事法が改正され医薬品販売が法的に禁止されるに至っている(小村式『越後の毒消し』巻町双書8、昭和38年、32ページ)。
- 11) 「秋祭りが終わると、さらに新潟でシオビキやニシンを仕入れ、馬に付けたり、カネタたりで、米沢・若松方面へ売りに行った」働き者の女性がいたことが紹介されている(西田彰一・茅原一也『弥彦・角田山麓の生い立ちと最近の地史』、新潟県文化財年報第一集、昭和31年、52ページ)。また、昭和11年には既に秋祭りに金物や唐物を持って行商に出ている(『新潟毎日新聞』昭和11年5月20日付)。
- 12) 聞き取り調査では、角田浜に素茶屋ができたのは、岩室と寺泊の人の2軒が昭和11年に作られたのが最初である。その後、昭和35年頃からポツポツと浜茶屋が作られていった。
- 13) 拙稿を参照されたい。
- 14) 行商してよかったという声は比較的多く聞かれる。たとえば、大原八重子「母と毒消し売り」(新潟女性史クラブ『竈のうた』考古堂、1981年、174ページ)、および細井幸子「行商に生きる・古俣キミ」(新潟女性史クラブ『雪華の刻をきざむ』、1989年、258ページ)を参照されたい。しかし、これらには行商してよかったと思う気持ちの背景説明はなされていない。
- 15) 1992年10月に新潟大学人文学部社会学実習Ⅱ・文化人類学実習で実施した悉皆調査による。参加者は、新潟大学人文学部の上田将教授、中村潔助教授、笹原恵助手、および筆者と学生たちであった。
- 16) キクさんの家族は、戦後、納屋住みから村の共有地を借りて昭和29年に家を建て独立している。畑と共有地を交換しており、現在は自宅に住んでいる。従って、土地の名義は村であるが、実質的には自宅となっている。村落が家を補完する機能を果たしていることが知られる。と同時に、本家に現在住んでいる世帯主は、この時「何もしてやらなかったから、分家っていえるかどうか分からん」と述べているが、この説明は村人は分与財産を分けなければ分家とは言わないということを伝えている。
- 17) 相続人以外の男は大工にする風習があった(西蒲原郡第五区教員協議会『郷土の展望』昭和12年、17ページ)。また、既に近世には大工の出稼ぎがおこなわれていた(小村式『越後の毒消し』50ページ)。
- 18) 「近代国家が社会を再編する戦略的拠点として『家族』があったこと、具体的には近代国家の形成過程において生活の技法や子育てにまつわる姿勢や性に関わる態度などが家族を拠点にして規律化されたことを明らかにした研究には、牟田和恵「戦略としての女—明治・大正の「女の言説」を巡って—」『思想』(No.812、岩波書店、1992年)などがある。
- 19) 明治大正年間に、都市下層労働者が性別によって分業していないことを明らかにしているものに、千本暁子「日本における性別役割分業の形成」(『制度としての<女>』平凡社、1990年)などがある。また、夫婦のうち「稼ぎのいいほうが働きに出た」のは、田畑のない非農家の場合に見られた(細井幸子「行商に生きる・古俣キミ」前掲書、256ページ)。
- 20) 拙稿を参照されたい。